



客神社祓殿と五重塔、千畳間

客神社祓殿の天井は、平安末期から流行する小組の格天井です。当時の最新式デザインですね。格天井は四角い升目に組まれた天井を指します。大きい升目の中には、さらに細かく升目が組んであります。小さく組んであるから小組というのです。小組格天井は、平

形で、少し小さく造られています。被殿は、清盛の頃には舞殿といいました。舞楽をするための建物です。客神社祓殿は本社祓殿と全く同じ

【客神社祓殿】永享五年（一四三三）再建
折上小組格天井は最高格式

町時代末期から桃山時代にかけたの再建なのですが、こうした細部に清盛時代の技法が残っています。非常に貴重な建築技法です。古建築を鑑賞する人は、こういうところまで見ていただきたいですね。日本中の社寺を探しても滅多にお目にかかれないでしょう。



垂木が棟木の下にある回廊天井部



参道から見た客神社本殿

の二棟の巨大な本殿を新設して、合計十一棟の小さな本殿を玉殿として、まとめて格納したのでしよう。

建築の造詣が深かった清盛

こちらの客神社本殿は、信じられないことですが、どんなにひどい高潮でも、内陣の玉殿は絶対に水に漬かりません。本殿内部の雪洞の向こうに朱塗りの階段が四段あります。内陣前の階段です。清盛以来八百五十年間、その三段目までしか水没したことがないのです。清盛が海上社殿を創建する以前からあった小さな本殿の位置（海拔高度）などを綿密に分析して、内陣の高さが設計されているのかもしれないですね。清盛の建築に対する造詣の深さが知られます。現代の建築家も見習うべきです。

【客神社拜殿と回廊の天井部】
平安後期の構造と、絶滅危惧種

手前側の客神社拜殿に目線を戻して、天井を見てみましょう。内部の上方を見ると、水平な天井はなく、

山形に並ぶ垂木が見えます。そして、前後に虹梁という梁が架かり、その上に暮股という装飾的な板材が載っています。平安時代の寝殿造に使われた天井の形式です。

さらに拜殿の正面に通っている回廊の天井も見てみましょう。回廊にも水平な天井はなく、山形に垂木が並んで見えています。この垂木の掛け方に大変な特徴があります。普通には垂木は棟木（屋内の頂部に渡される水平材）の上に掛けるものです。ところが、この回廊では、左右から上ってくる垂木が棟木の下で合わさっています。棟木は垂木の合わせ目の上に載っています。垂木と棟木の位置が上下逆になっているのです。このような構造は、平安時代後期から鎌倉時代に、天井を張らない場合に使用された特殊技法です。南北朝時代以降ではほとんど滅亡しています。だから、これは「絶滅危惧種」だということです。

回廊は四百年ほど前の室



山形の垂木が並ぶ、客神社拜殿天井部